



# 漫 録



## 東海道視察旅行案内記 (完)

### 桑 名 か ら

○桑名町 三重縣桑名郡に屬し揖斐川の沖積平野に出來た古い町で東海道五十三次の要衝として繁榮した處である、伊勢大橋を西に渡りて此町に入る。寛政の頃松平定信

渡つたのは天明時代から始まつたものであらう、舊名は間遠の渡とも稱せられたことがある。古昔天武天皇尾州熱田へ御遷幸の時此渡海長きにより間遠なりと仰せありて着岸を待ち給ふた史譚がある、間遠の渡の稱茲に始まつたものだと傳へられて居る。

公（即ち白河樂翁公）此に城主たりし日、藩士に節約を訓へた所があつて其遺蹟として今尙蕪を續模様としたる桑名盆が名産として作製販賣されて居る、萬古燒、時雨蛤の如きは有名な産物である、次驛四日市へ三里八丁。あと舟は桑名泊りや夕霞との古句がある。

「有明の月に間遠のわたりして里に急かぬ夜半の舟人」と此地は伊勢路の始めに當るので諸國から伊勢參宮の人々に神國の入口なるを知らしめんとて此處に大鳥居を建て之を一ノ鳥居と稱して居る。

### ○七里の渡場址

熟田宮から桑名に海上七里を舟にて

○薩摩義士の墓 桑名町海藏寺に在る、寶曆年中（約百七十七年前）徳川幕府は木曾、揖斐、長良の三川治水

工事を薩藩に命ず、薩藩の平田靱負は主命を奉し奉行となり部下を率ゐて具さに辛酸を嘗め粉骨碎身漸く工を竣へた時に寶曆五年三月である、此工事の爲尾張、美濃、伊勢の三州沿岸の地は累年の水難圍厄から免かるゝことを得たが工費は意外に巨額となつたので一死以て君公に辨疏せんと欲し靱負以下二十二入慙然として屠腹した其遺骸を埋葬したのが此墓所である。

#### 四日市から

〔東京から四六五・五キロ  
京都から一〇四キロ〕

○四日市市 東海道五十三次の一驛として古くから知られてゐる、桑名へ三里餘石薬師へ二里半餘の處に在る、今日市制がしかれて北伊勢第一の都會である 綠茶、萬古燒綿織物などの工業品を産する、四日市港は昭和五年築港の工を竣へ伊勢海に於て名古屋港に次ぐ重要貿易港である、市の北に野生のいぬなし、あひなしと云ふ原始的な梨がある指定の天然記念物として貴重せられて居る。

#### ○四日市受信所

名古屋無線電信局の對歐無線電信受

信所である昭和三年四月の開設でロンドン、ベルリン、パリ、ワルソーの各對手局からの送信を受け愛知縣下依佐美無線電信發信所と相並んで我邦無電の機關となつて居る。

#### ○追分

三重郡日永村大字泊に在る地點で國道一號線と二號路線の分岐點で東海道は此處から二號路線を迎るのである、一號路線は所謂伊勢參宮道で昔時から此追分で東海道と分れ神戸、白子、上野、津、雲津、松坂、小俣を経て山田に達する道路である。

#### ○杖突坂

三重郡出部村大字采女に在る昔時日本武尊東征の時御劍を杖に突て躰へ賜へる故に杖突と稱す路傍に「歩ならば杖つき坂を落馬哉」と云ふ芭蕉翁の句碑がある。又回國道記に「老らくのためによしや杖つきのつきぬ旅路をたどるこの日に」とあるを見る。

#### 石薬師から

#### ○石薬師村

鈴鹿郡の一農村であるが、石薬師寺のある爲めに東海道五十三次の一宿驛となつた地である、石薬

師寺は西福寺の事で神龜年中(千二百餘年前)僧泰澄の開基で眞言宗に屬す。長七尺五寸の石佛を本尊とす、精米を加持し世上に與へ病難を救ひ、殊に乳汁なき婦人は乳の出ること瀧の如しとの秘法を授けたるもので之を藥師の八割米と云ふと傳へらる、此處から庄野へは二十七丁の短距離である。

庄野から

○庄野村 鹿鈴郡の一農村となつておるが徳川時代寛永元年からの宿驛である、此地を五十三次の一宿驛と爲したことは左程の理由あつたとも思はれない、龜山へは二里であるが庄野とは一里にも足らぬ里程である、古の莊園の地で火米を小俵子に造りて售つたものであると傳へられて居る。

龜山から

○龜山町 鈴鹿郡中樞要の衝衢である、大阪より來る

鐵路と名古屋より來る鐵路と更らに宇治山田に行く鐵路との連絡地點で餘程昔からの宿驛である。

○龜山城址 此城は天正年間岡本宗憲が築造したもので慶長五年までは岡本家の居城であつたが關ヶ原役後徳川の爲め没收せられ爾後城主屢々交替せられたものである。

○一里塚 龜山町地内出野村に榎の大き地上四尺周圍高十六尺四寸の一樹がある之を一里の榎と云ふ。

○能褒野御陵 龜山町の東北川崎村大字女ヶ坂に在る日本武尊の御陵で明治十二年確定し今は宮内省の管轄に屬して居る、村内に縣社能褒野神社がある日本武尊を奉祀する日本書紀に日本武尊江州膽吹山に入り大蛇に逢ひて病を獲伊勢に移り能褒野に崩し玉へる記事があるを以て見るも此處に葬られたるものと信ぜらる。

關から

○關町 鈴鹿郡内の一名邑である、國道二號路線のみでなく山田から津、久保田を経て椋本村から此關へ入る伊

勢參宮道の別路がある又伊賀路も柘植から加太を経て此地に入つて居る、斯く交通の要路に當つておる地であるから古來有名な宿驛で東海道五十三次でも言ひ囃されて居る所である、龜山へも坂の下へも一里半程である。新拾遺集に「振りすて、誰かは越さむ、すゞか山、關屋は夜半の月ももりけり」と旅情の哀愁を詠つて居るものがある。

### ○地藏院

「關の地藏さんに振袖きせて奈良の大佛さんを鞆に取る」との俗語で名高い關の地藏は關中町に在る鈴鹿關は九度の沿革があるから九關山とも稱せらるゝと傳へられておる行基の開山に係り元應年中地藏尊體は炎焼し文明四年再建し、一休和尚開眼せりと、その開眼の歌として傳へらるゝものは「釋迦はすぎ彌勤はいまだ出でぬ間にかゝる浮世に目あかしめ地藏」院の境内には明治天皇の行在所がある、愛染堂とも稱する護摩堂は特別保護建造物となつて居る、徳川四代將軍家綱の建立せる堂である、岩佐又兵衛回國記の一文頗る面白き感がする「關の地藏はふりたる堂の中に大の地藏のおはします、相好尊く見はけれど

も紫磨黄金の肌もよこれ御衣の袖のいろわかず、聞ならく六道能化にましませば爰とても道のはた也導かせ給へ云々。」

### ○小まんの墓

關町福藏寺にある、長州侯の家臣某の未亡人夫の仇を討たんとて妊娠の身でありながら仇人の跡を追ふて此地に来て旅宿山田屋吉右衛門方に泊つた、日ならずして小まんを産み落したが産後が悪くなつて死んだ、死に臨み宿主吉右衛門に遺言して小まん生長の後は母の遺志を繼ぎ父の仇を討ちて父母の靈を慰めくれる様にと依頼した、吉右衛門夫婦は己が娘として文武兩道を學ばしめ十八歳になつて仇を討たしめたと云ふ譚がある、關の小まんが龜山かよひ月に雪駄が二十五足」との俗語は武術修道の爲めに龜山の道場に日通ひしたことを唄つたものだと言はれて居る。

### 坂の下から

### ○坂下村

鈴鹿郡關町の西北に位し鈴鹿川の支源一ノ

瀬川の源頭に在る多津加美坂の下にあるから坂下の名稱がある、五十三次の一で次驛土山へ二里半。

○筆捨山 坂下村内に在る畫聖狩野元信此處の風景を賞し將に畫く所あらんとするの時景致忽ち變じて雲煙去來して其の眞を寫すことを得ざることとなり筆を投じて去つたと云ふので此山名がある。

○鈴鹿峠の改良 鈴鹿峠即ち伊勢から近江に越ゆる國道であるが坂下村から上ると多津加美坂と云ひ坂路八町二七折其高峰を三子山と稱する、三子山は深谷幽溪峻岨を極めて八百八谷があると傳へられて居る、斯る天險があるから鈴鹿關は美濃の不破、越前の發發と共に上古の三關と稱せられたものだが固より時代の變遷に伴ふて天下の難關も變移した、鈴鹿峠は關東の關所、箱根に次いで難路であつたことは事實である、林春齋の詩に「勢州鈴鹿鎖關家、九折八町崑徑斜、秋色嵐光多感慨、護花聲裡御花」とあるが、端唄を見ると「のぼりくだりのおつづら馬よ、さてもみごとな手綱染かいな、まご衆のくせか高聲で、鈴をたよ

りにりに小諸筋坂はてるくすずかはくもる、あひの土山雨がふる」とある、唄に坂とあるは多津加美を云ふのは疑ひない、此峠の頂、縣界から附近都市への距離は三重縣の調査によると神戸へ三六里一。大阪へ二九里三、京都へ一七里五。大津へ一七里六。水口へ六里。土山へ二里。坂下へ一九丁。關へ二里一。津へ七里九。山田へ一九里一。龜山へ三里三。四日市へ九里四。名古屋へ一九里四となつて居る。此坂路の改修が必要を感じられ三重、滋賀兩縣協議して延長一、三〇〇間幅員三間半の新道を作り更に一三五間の鈴鹿隧道を造つた。即ち三重縣鈴鹿郡坂下村大字坂下から滋賀縣甲賀郡山内村大存山中に至る間、延長道路三、三九二・八六米（内三重縣三、一一二・七〇米滋賀縣二七〇・一六米）隧道二四五・四五米（内三重縣五九・八〇米滋賀縣一八五・六五米）合計三、六三八・三二米有効幅員隧道共六、三六米工費は金七拾貳萬八千六百六十三圓六十六錢（内三重縣七分滋賀縣三分負擔）大正十一年六月起工し昭和三年三月竣工を告げた。此工事は三重縣に於て全部施工したが同隧道から

土山町北土山に至る五・四杆の區間は、大正十三年から昭和六年に涉り有効幅員五・五米として工費金三十五萬七千九百圓を以て滋賀縣に於て改修した。

此難路の改修は神戸、大阪、京都方面から交通産業の振興等に及ぼした効果の著大なることは云ふまでもないことである。

○田村神社 甲賀郡土山町北土山に縣社田村神社がある、境内森嚴である阪上田村麿鈴鹿山の賊を誅戮した關係があるからであらう。即ち祭神は阪上田村麿である。

## 土山から

○土山町 鈴鹿山の西麓に在る宿驛があつた地で甲賀部に屬する一農村である、水口へ二里半、關更詠して「土山や歌にも歌ふ歌しぐれ」と云つてゐるが今は其の姿を見ることが出来ない。

○白川橋 鮎川黒川の二川土山の西に會して土山川と云ふ横田川の源を爲す。其横田川は即ち野州郡に入りて野

州川となる、此川に架する白川橋は土山町大野村入會で延長四八米、幅員六米、上路式鋼樑桁橋、橋面アスファルトコンクリート鋪裝で工費金四萬六千圓を投じ昭和五年十二月竣功した、また同橋取付道路三七四米は同年金五萬五千八百圓を以て改修した。

## 水口から

○水口村 甲賀郡内上山川の北岸、大甲賀山の下に在つて東海道五十三次の一であつた、今は交通上甚だしく閑却せられて一農村と化した觀がある、兼良公藤河記に「水口をすくとて其日も雨風やまさりければ、雨ふれば小田の水口せきもあへすたく蛙の聲をあらそふ、からうして五十町計行き新宮の馬場に至る云々」とあるを見る。

○水口城址 天正年中の築城で慶長五年の亂に徳川方池田備中守に攻め落されて徳川の番城となつた、天和二年以來加藤氏の居城となつたが明治維新に際し廢城取毀れた。

○横田橋

野州川に架する一橋で延長一九六米幅員六  
三米連續I型鐵筋混凝土の桁橋でアスファルトブロック工  
費金十萬四千六百圓である、同縣前後取付は道路延長一、  
九四三米の區間は國庫補助を得工費金二十萬三千五百圓を  
以て昭和四年度改修を施した。

○天保義民の碑

水口大徳寺の境内に在る、所謂甲賀  
一揆の碑である、天保十三年附近一帯の地方民が幕吏の苛  
酷なる課税に反抗し水口、膳所二城主の制止も聞き容れず  
竹槍・蓑旗を手にして三上村の幕吏宿泊所を襲撃し書類を  
破棄した、幕府は此等農民を捕拿して三十六人を死刑流刑  
に處した、そして課税は無期延期と爲り漸く鎮つた、明治  
二年大赦せられたので遺族等相談つて此碑を建てたもの  
である。

石部から

○石部町

甲賀郡西端の宿驛で水口へ三里半、草津へ  
三里の處にある、萬葉集に「白まゆみ石部の山のときはな

るいのちあらはや戀つゝ居らむ」と其石部山の麓に在るか  
此一邑である、横田川北を流れて居る古來石灰を産するの  
で石部と稱せらるゝとか。

○三上山

石部から草津に向ひ國道は栗田郡葉山村に  
入る、東方野洲川を隔て、遙かに三上山の聳へ立つを見る  
此山は其形から近江富士と云ひ、蜈蚣山とも稱せらる、野  
州郡三上村に在る。山麓に官幣中社御上神社又三上神社が  
ある、天之御影命を祭る、此三上山は俵藤太秀卿が大百足  
を射殺した古實があると傳へられて居る。

○聖蹟

葉山村大存六地藏地内場道の傍に間口の廣き  
舊家がある、此は有名な和中散の發賣家である。明治大帝  
屢々御小休あらせられた榮光に浴した家で今尙舊型を保存  
して居る、大角謙三氏の宅が即ち夫れである。

草津から

○草津町

栗太郡の中央に位する五十三次の有名な一  
宿驛である、草津の名稱は種々の物貨の集散せる津頭の義

〔東京から五〇七キロ、  
京都から二五キロ〕

なりと唱へられて居る、爲村卿紀行に「今宵かはる草津の里の旅枕むすびもなれぬつゆせいふせき」と云ふ歌がある、今も陸運の樞要地點となつてゐる。大江へ三里半「右左りわかるる霧や湖と陸」

### ○町内國道の改修

町の東端から南裏を老上村野路に至る一・九軒は政府直轄で工費金拾五萬圓を以て施工中である。

### ○草津國道

老上村野路より瀬田町大江に至る四七三四米は有効幅員を九米に改め昭和八年度政府直轄工事として工費金拾五萬圓を以て改良を施した尙大江より瀬田橋をはさみ滋賀郡石山村大字鳥居川町電車踏切に至る○・九軒は昭和九年度事業として一二米に改修することにし施工中である。

### ○國道分岐點

國道二號路線即ち東海道と關ヶ原米原を經過し來る國道十四號路線と草津町大路井で交會するのである。乃ち兩路線は京都方面から見れば此處で一は東南に一は東北に向つて分岐して居る。

### ○姥が餅

國道の分岐點から東方中山道(十四號路線)一丁半の處に名物「姥が餅」の本舗がある。永祿十二年近江源氏の正統佐々木左京大夫義賢一族が織田信長の爲めに亡され、其一族郎黨各地に散在せしが詮索いとも嚴なりし爲めに誅戮の難に遭いたるもの多し當時義賢の曾孫に三歳の幼兒あり義賢臨終の際其乳母福井と呼ぶ者を招き貞宗の守刀を授け密かに後事を托す乳母旨を奉し幼兒を抱き郷里草津に身を潜め傍ら餅を製して往還の諸人に粥き養育の資と爲す當時世評其乳母の誠忠を感じ誰云ふとなく乳母が餅と云ひ囃しける、殊に草津は東海道と中山道分岐の要路なれば士農工商文人墨客皆齊しく足を止む俗歌に「勢田へ廻るか矢橋へ下るか此處が思案の乳母が餅」と傳へられて居る。

### ○野路の玉川

新國道を稍南下した東方老上村野路郷國道路傍に在る近世六玉川の一として名高かつた今は三間に五間許の小池と變して居る、昔時老上川又狼川の一派流なりしならんか千載集所載の俊頼の歌を刻した碑がある



「明日もこん野路の玉川萩こえて色ある波に月やとりけり」

その他此地を詠したる名歌は「打わたる瀬田の長橋ほともなく一むら見ゆる野路の松原(夫木)・「さを鹿のしがらむ萩に秋見えて月も色なる野路の玉川」(大宰権師仲光)「近江路や野路の旅人いそがなん野洲か原とて遠からぬかは(山家集)」「うちしくれふるさとおもふ袖ぬれて行くさき遠き野路のしぬ原」(十六夜日記)

○建部神社 栗太郎瀬田村に在る古の「近江國一ノ宮」である、瀬田の唐橋の東方大野山の麓、緑の森に包まれておる官幣大社である。祭神は日本武尊で由來武門の尊信厚く源頼朝が社頭に通夜したものと見へて、平家物語に「勢田には橋もなく、舟にて向の地へ渡り、社の見えけるを如何なる神ぞと問ひ玉へば、建部明神と申す、佐殿さらば今夜は此御前に通夜して、行路の祈を申さんとて留まり玉ふ」とある。

### ○瀬田の唐橋

琵琶湖の水、勢多の西に繋束し一條の

細流となつて南流す之を勢多川と云ふ、下流幾多の急湍となり宇治に至る、湖口から宇治まで六里餘末は即ち宇治川淀川である、栗太郎瀬田村大字橋本と大津市石山鳥居川町と連絡する爲め此勢多川に架する長橋を瀬田の唐橋と云ふ貞觀十三年(千五十二年前)には既に架橋せられてあつたものと思はる、兼盛の歌には「みつきもの絶す備ふる東路の瀬田のなかはし音もととろに」と又大江匡房の歌には「楨の板もこけむす計り成りにけり幾世へぬらん瀬田の長橋」とある、此橋は屢々兵戰に打ち落されたことが歴史に散見する。現今の橋梁は延長(大橋一七一・八米、小橋五一・八米)二三三・六米で有効幅員七・四米工型鋼桁鐵筋混凝土床版、橋面は檜板で欄干は擬寶珠を着け古風な雅致ある感を現はす、工費金四拾六萬圓で大正十三年六月竣功昭和九年四月更らに橋面をアスファルトブロックに改築した。所謂近江八景の一で瀬田の夕照として知られ又「急がばまはれ瀬田の唐橋」と俚諺に唱へられ或は藤原秀郷の蜈蚣退治の傳説中にも知られて居る。本年九月二十一日の大颱風で鐵道列

車が吹き倒され多數の死傷者を出した東海道鐵橋は此唐橋の上流湖口に近く架設されて居る鐵道橋である。

### ○石山寺

滋賀郡石山町大字寺邊に在る古義眞言宗東寺派に屬する一名刹で石光山石山寺と稱す。本尊は如意輪觀世音、天平勝寶年中(約千八十年前)聖武天皇の御宇良辨僧正勅を奉して建立した寺である、現に滋賀縣最古の木造建築物で、内陣は平安末期、外陣は淀君の修補に係り

堂内源氏の間は東面して一曲の窓を開いて居る、紫式部か源氏物語をものしたる處であると傳へられて居る、多寶塔は鎌倉初期の建立で其他國寶實に三十餘點に及び、境内は奇巖珍石で充され眺望絶佳殊に觀月の光景は「都にも人や待つらん石山の峰に残れるあきの秋の月」と新古今集にあるを以ても知らるる、又近衛殿の歌に「石山やにほてる月のさやけさは唐土までも曇なからむ」とある、橋直幹の詩中「蒼波路遠雲千里、白霧雲深鳥一聲」の一句は世之を稱する所である。

### ○南郷の洗堰

石山の麓を滿々と流れて居る瀬田川を

數丁下つた所に不斷奔流飛瀑の壯觀を呈してある起伏自在の堰がある、明治三十五年から同三十七年に互り工費金貳拾五萬圓を投じた大工作物である、全長九十五間、一から一秒時六千立方尺餘の排水を爲して居る、此の水流れて宇治川となり淀川と稱せられて大阪灣に注ぐので琵琶湖と下流地方との相反する治水上の利害を茲て調節して居るのである。

### ○粟津ヶ原

石山鳥居川から國鐵を踏切つて膳所別條町まで道路の兩側に老松が並んで居る此邊を粟津ヶ原と云ふ。東に三上、伊吹、西に比良比叡などの諸山を遙か望んで黒松の並木は延びるがまゝに延び茂るが儘に茂つて居る此處が所謂粟津の青嵐の名を恣にして居る、今は此自然美と不調和な大規模の人絹工場が建設せられて居る、壽永の昔源の範頼同義經の兩軍に追はれて木曾の義仲及今井兼平が壯烈な戦死を遂げた處である、兼平の墓は工場を隔て、西方田圃の中に在る。

### ○膳所の城址

膳所町の中央湖岸にある城址で慶長六

年大津城を移築したもので、本丸は湖中に突出し壘壁樓壇を波に浸し「瀬田の唐橋唐金擬寶珠水にうつるは膳所の城

……」と唄はれて居つたが明治維新の際毀られた、今は石麓公園と稱せられて居る、打出の濱と云はれて居る所、湖岸に一本の笠形の松がある、昔此處は矢走に渡る渡船場だったので何かの由縁で呼次の松と呼ばれておる、天正十年明智光秀織田信長を本能寺に弑するや羽柴秀吉中國より馬を返し山崎に戦つたその頃光秀の族光任安土城に在つて光秀の敗戦を聞き千餘騎を率ゐて之を援けんものと進軍したが堀秀政の爲めに拒られて破れ光任は打出の濱より駒を湖水に乘入れ斜に柳ヶ崎に遁れ坂本の城に入り光秀の死を知り自ら妻子を殺し火を城に放ち自刃した、之か有名な明智左馬之介の湖水渡である。

○義仲寺と芭蕉翁の碑

膳所から北へ西へ幾曲りもし馬場に入る國道に添ひ南側に義仲寺がある壽永三年今井兼平と共に瀬田粟津にかけて鎌倉軍と合戦した旭將軍木曾義仲の墓のある寺である、夫れと並んで俳聖芭蕉翁桃青碑

がある。元祿七年十月十二日「旅にやみて夢は枯野をかける」との一句を遺して死す仍て此處に葬る。

○琵琶湖

湖は周圍七十餘里水面四六方に及び滋賀縣全面積の六分の一を占めてゐる、古昔は淡海と云ひ又近江の海或は鳩の海と呼ばれた、湖の風光は文人墨客は勿論あらゆる人々に觀賞せられ、文章に詩歌に俳句に繪畫に擧げて數ふべからざる程である、支那の瀟湘八景に擬して明應九年の頃近衛關白が撰んだ近江八景と稱するものがある其の題目は「三井晚鐘、石山秋月、堅田落雁、粟津青嵐、矢橋歸帆、比良暮雪、唐崎夜雨、勢田夕照」であるが詠曲八景の詞は中々に翫味すべきものである「あれに見えたる比良の山、小松が原に吹く嵐は、山市の晴嵐もかくやらんと思はれ、眞野の入江の洲崎の眞砂は雲かと思えて江天の暮雪に異ならず、あらおもしろやと見る程に、いとゞ心の澄渡る、堅田の浦の釣舟の、沖より家路に急ぐをば、速浦の歸帆と打ながめ、雪の一むら残れるは、夜の雨の名ごり歎、扱比叡の鐘の聲を、遠寺の晚鐘かと打聞き、それ辛崎

に翼をたると沙鷗、平沙の落雁に之をなぞらへ、洞庭の秋の月には、鏡の山をたとへたり、誰を漁村の夕照につりたる者とは思ふべき。」

## 大津から

〔東京から五二キロ  
京都から一一キロ〕

○大津市 滋賀郡の南端、逢坂山の北麓、琵琶湖の南岸に在つて昔時から國道の禁喉として駄馬牛車を以て洛中へ運送すること絡繹として絶へざる東海道五十三次中の有名な宿驛で市中札ノ辻が其跡である、京都へ三里水陸の要害を爲す地で今滋賀縣廳は此地に在る、大江匡房の歌に「君が世は大津の濱のまさごもて數にとるともつきしとぞ思ふ」とある又萬葉集には「我いのちまさくあらば又も見む滋賀の大津によする白波」とあるを見る、市の湖岸に豊臣氏坂本城を此地に移したる大津城址がある。

○逢坂の關址 逢坂の關は「名にし負はば逢坂山のさねかつら人に知られでくるよしもがな」の古歌と共に有名である。又「これやこの行くもかへるも分れても知るも知

らぬも逢坂の關」と蟬丸は歌つた、往昔より本街道は大津及京師間の唯一の要路で又東海道、北陸道の交通を悉く集めて帝都に通ずる要衝であつたから軍事上畿内防備の爲め重要な地點であつたものである、關には門鍵も閉さず出入の禁のなかつた時代もあるが、又嚴重に警備した時代もあつた、清少納言が「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも夜にあふさかの關はゆるさじ」と歌に詠じた處を見ると警固の嚴しかつたことも想はせらる、近年新國道に沿ふ西側路傍に關址が建立せられた。

○蟬丸神社 逢坂の關址を中心として前後數丁の間に蟬丸神社がある、上中下の三社で何れも新國道の西側にある、その内上中二社は頂上附近の幽邃の地にあるが下社は關址を越えて渺々たる大湖の景觀が一度に展開する、下り坂を稍下つて踏切を過ぎた市街の中に在る郷社で關清水大明神蟬丸神社と稱する、嵯峨天皇の御宇關所鎮護の爲め道友大神を齋祀し後蟬丸の靈を合祀したと言ふ、境内に清水が湧出してゐるが太平記中の「憂きをばとめぬ逢坂の關の

清水に袖ぬらし」とあるは此清水を云ふならむ、蟬丸は延喜の御代に於ける世捨人で草庵を逢坂山に結んで居た、琵琶をよくし歌に長し本朝歌舞音曲の祖神としてその道の人々の尊崇が厚いことであつた。蟬丸が逢坂山の草庵にあるの頃、都に博雅の三位と言ふ風流人が一度流泉啄木と言ふ琵琶の秘曲を聞き度いと屢々蟬丸に乞ふた處が拒まれたので夜な夜な庵のあたりに忍んで耳を傾けること三年に及んだ或る秋の月明の一夜庵の中かう「あゝ美しい月の夜だ吾れ世を捨てたものゝ今宵は何となく人懐しく覺るかゝる時樂の道に思入つた女でもあつて一夜を語り明かしたなら……」と言ふ蟬丸の獨言を聞き胸おどらして走り入りとうく思ひを達し秘曲を學び之を後世に傳へたと云ふ譚がある。

○關寺橋 東海道線國鐵逢坂山隧道東口に跨線橋がある、延長三一・三米幅一二米で鋼鉄鐵筋コンクリート床板橋、橋面アスファルトブロック工費金四萬千七百圓で昭和八年九月竣功した。

○京津國道の改修 國道二號路線中大津市から京都市までの間を通稱京津國道と云ふ、時局匡救事業として内務省直轄で昭和六年四月起工し昭和八年三月竣功した、滋賀縣側に於ては大津市上片原町逢坂山峠地先京都府側に於ては東山三條通蹴上を工事起點とし兩府縣境界まで合計延長七、六〇〇米に及び更に滋賀縣施工に係る大津市札ノ辻より逢坂山峠地先に至る延長一、五〇〇米の完成に依り京津間は完全に連絡し交通上大刷新を見るに至つた。即ち大津市札ノ辻から京都市東山區谷川町間延長九・一籽（京都府四・九籽。滋賀縣四・二籽、幅員一六米乃至一一米路面は膠石鋪裝工費金貳百參拾七萬圓である。

○天智天皇御陵 京都府宇治郡山科村（大石由良之助良雄の浪居で有名である）の西部で東海道鐵道と交叉する地點から少しく西に行きたる處の北側に在る御陵で崇嚴の兆域である。

○日の岡峠 一に日向に作る、國道二號路線に屬す、三面皆山にて唯東の一面のみ明豁で日光を受くること最も

早きの故を以て此名ありと云ふ、昔時は一路の小徑僅かに  
行旅を通せしが木食上人工を起して車馬の便を圖り今に  
至るまで其功德を懷はしむるものがある、京都府では明治  
八年此時を開鑿し交通上の利便に供したが昭和七年の京津  
國道改良の結果福員を六間に擴張、路面は鋪裝せられ近代  
式道路となつた。

○平安神宮 桓武天皇を祭る明治二十八年平安遷都千  
百年祭を舉行し桓武天皇の宏漢を追慕して創建したる所で  
ある、同年官幣大社に列せらる、新殿は往古平安京の大極  
殿及び應天門を模造し桓武天皇の時代を追懷せしむ又時代  
祭は毎年十月二十二日に行はる、京都の有名な祭事で過去  
一千餘年間平安朝より明治初年まで各時代の武裝を爲し行  
列して神幸の式を行ふと云ふ。

○疎水運河及インクライン 琵琶湖の水を引き其落差  
を利用して電氣を起し電燈、電車其他各種工業の原動力を  
得又運輸灌漑に便せんが爲めに開鑿したもので起工當時に  
於ては一大工事であつた其の工事は二期に分ちて施工せら

れた、其一期は京都府知事北垣國道の計畫により明治十八  
年八月起工し同二十七年九月幹支線を完成した工費金約貳  
百萬圓其の幹線は天津市三保ノ崎を取水口とし三條蹴上に  
至る延長六、一〇七間内隧道一、八七五間一秒時の流量三六  
〇立方尺蹴上の「ダム」から疎水運河の間は即ち「インク  
ライン」にして陸舟より上下し運輸の便を爲す支線は「ダ  
ム」より分岐して南禪寺の東を流れ鹿ヶ谷町、淨土寺町及  
北白川町を経て西に轉じ鴨川の河底を横斷して堀川に入る  
第二期は明治四十一年十月起工し同四十五年六月竣功した  
第一疎水の北に沿ひ長等山下を経て滋賀縣志賀郡藤屋に出  
て爰から第一疎水と離れて山科町安朱に再びに第一と接近  
し安祥寺山下を貫き併行して黒谷日ノ岡の兩隧道を潛り三  
條蹴上に至つて第一に合す此延長四、〇七九間で全部隧道  
式とす、以上兩疎水に依る引用總水量は一秒時八五〇立方  
尺で、内一〇立方尺御所用水九立方尺山科町灌漑用水及防  
火用五六立方尺其の他防火及水車用約一一立方尺合計八  
五立方尺を除き残り七七〇立方尺の内七五〇立方尺は發

電用他は支線水路に放流せられて居る、京都市は此疏水事業の爲め湖の水位低下を生ぜしめ、大津市の井戸を涸水せしめたるが爲め京都市の負擔を以て水道を布設したものである。

### 京都市三條大橋

〔東京から五三二キロ〕

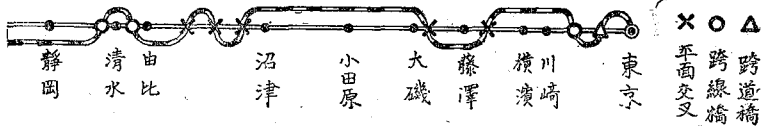
三條大橋は四條五條と共に鴨川三大橋の一である、天正十八年豊臣秀吉増田長盛に命じ造營せしめた延長六三間幅員五間欄干の擬寶珠は紫銅にて當時諸侯の寄附になつたものである、維新後の明治十四年に一度改造し同二十七年更に修築同四十五年三月三條通擴築に際し改築し大正元年十月落成す、木造長五四間幅九間型式舊の如くした、本橋の中央は東海東山、北陸等諸道の起點として大正九年道路法施行まで里程の元標となつておつた。

案内記終

### 後記

東海道國道路線と東海道國鐵本線との關係略説

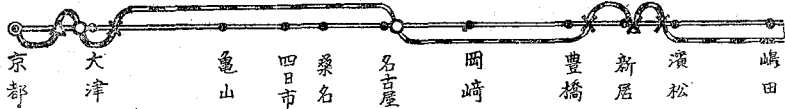
東海道と稱する國道（一號及二號路線）は園と京郡と江戸の二大都市を連絡する官路であつて、西行するとすれば江戸日本橋を起點とし品川を経て神奈川、戸塚、小田原、箱根、三島、沼津、府中（靜岡）掛川、濱松、吉田（豊橋）岡崎の諸城市を經過し宮（名古屋市熱田）に至り海路七里渡を渡りて伊勢の桑名に出て四日市、龜山、關を経て鈴鹿峠を越へ草津にて中山道と合し膳所大津を経て京都三條大橋に至る其行程百二十四里八丁で其間五十三次の宿驛が設けられ、主として西國大名參覲の往來筋であつた。現今の國道東海道は大體從來の街道筋に依る即ち日本橋を起點として東京驛を起點とする國鐵東海道本線鐵路の東側に並行し芝區芝口二丁目で跨道橋にて斜斷せられ西側に出て更に芝區高輪八ツ山で跨線橋に依り國鐵を横斷して國鐵は西側に國道は東側となり相並んで南行し横濱市櫻木町八丁目に至り、共に方向を西に轉じて並行し程土谷驛前をすぎ、程土谷元町地内權太坂東登口で國道は南西に曲折して國鐵と離れ戸塚驛の東端にて再び相接し平面交叉して國道は北



側に出て國鐵は南に大船に出るも國道は北方丘陵上をや、直線に南西に走り藤澤にて少しく國鐵と相近づき平塚と大磯を境する花水橋を涉り大磯化粧坂で平面交叉し更らに並行しながら西に向ひ小田原に至る、國鐵は國府津から北方遠く離れて松田山北を経て御殿場に出て南に走りて沼津に至るも國道は小田原の西端で國鐵熱海線を平面を以て横斷し湯本塔ノ澤を経て木賀に出で鷹巢山二子山の北西麓をめぐり芦の湖畔を北東から南西に箱根に上り三島に下りて沼津に至る、夫より西行し同町大字大塚で國鐵と平面交叉して北側に出て同町大字植田で復平面交叉して南側となつて鈴川驛の東端に至つて更らに國鐵を平面的に横斷して北に走り富士川橋を渡り南に向ひて由比町地内倉澤で跨線橋により國鐵の南側に

袖師村に至りて國鐵と殆ど並行して静岡市に至る。市中を横斷して阿部川橋を渡り國鐵は海岸に沿ふて西行するに反し國道は北西に更らに南西方向に迂曲し宇津ノ谷峠を越え岡部藤枝島田金谷町を経て小夜の中山を越えて掛川に至り國鐵と相接し袋井見附中泉を経て濱松市に入る。同市淺田町で國鐵を南方に平面横斷し西行して濱名湖口辨天島を経て新居町で南に平面交叉し國鐵は北方に國道は南方に漸く相隔り二川町の東端で平面交叉し國道は北側に出て豊橋市に至る、同市からは國鐵南側に國道北側に略ぼ相並行して國道は知立をすぎ鳴海附近でや、相近づき名古屋市内熱田橋の東方浮島地内に於て跨線橋により國鐵を横斷す。國鐵東海道本線はここより北行して岐阜に出て西行大垣を経て米原に至り方向を西南に轉じ彦根を経て草津に至るのであるのに國道は之に反して熱田橋を渡りて西に向ひ國鐵とは次第に遠く隔り木曾、揖斐、長良三川の下流に架する尾張大橋及伊勢大橋を渡り桑名を経て南西に龜山に出て西行關町を經、西北に鈴鹿峠を越へて草津に至つて國鐵に近づき





西方に並行し琵琶湖南を走り瀬田橋を渡り大津市内石山驛の東端で國鐵と平面横斷して北側に出て湖に沿ふて大津市に入り更らに逢坂トンネル東口に至つて跨線橋に依り國鐵と交叉し京都府下山科の西端にて國鐵と跨道橋で交叉し北西に向ひて三條大橋に達する。國鐵は山科から西に京都七條京都驛に至るのである。

○附 録

因に太平記中俊基朝臣の東下り（京都より鎌倉までの旅行記）と小畑詩山の「東海道中詩」（天保版）すこぶる興味を感ずるから附録として之をかゝることとする。

○俊基朝臣東下り

「落花の雪に踏み迷ふ交野（かたの）の春の櫻がり紅葉の錦を衣てかへる嵐の山の秋の暮

一夜を明かすほどだにも旅寝となればものうきに恩愛のちぎり浅からぬ我が故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き年久しくも住み馴れし九重の帝都をば今を限りと願みて思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞあはれなる。

憂をばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて末は山路を打出の濱沖を遙かに見渡せば鹽ならぬ海にこがれて行く身をうき船の浮き沈み駒もとどろと踏み鳴らす勢多の長橋打ち渡り行きかふ人にあふみぢや世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の木下露に袖ぬれて風に露散る篠原や篠分くる道を過ぎ行けば鏡の山はありとも泪に曇りて見えわかず物を思へば夜の間にもおいそのもの下草に駒を止めて願みる故郷を雲や隔つらん。

番場、醒ヶ井、柏原、不破の關屋は荒れ果ててなほもるものは秋の雨のいつか我がみのをばりなる熱田の八劍伏し拜み汐干に今やなるみがた。かたぶく月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ濱名の橋の夕潮に引く人もなき捨小船沈みはてぬる身にしあれば誰れか哀れ

とゆふぐれの晩鐘（いりあひ）鳴れば今はとて池田の宿に  
著き給ふ。

元暦元年の頃かとよ重衡の中將の東夷のために囚はれて  
此の宿に著き給ひしに「東路の埴生の小屋のいふせきに故  
郷いかにこひしかるらん」と長者の娘が詠みたりし其の古  
へのあはれまでも思ひ残さぬ泪なり。

旅館の燈幽かにして鷄鳴、曉を催せば匹馬風に嘶いて天  
龍川を打ち渡り小夜の中山越え行けば白雲路を埋み來てそ  
ことも知らぬ夕暮に家郷の天を望みても昔西行法師が「命  
なりけり」と詠じつゝ二度越えしあとももうらやましく  
ぞ思はれける。

隙行く駒の足はやみ日己に亭午にのぼれば餉進らす程  
とて輿を庭前に昇き止む。轆を叩きて警固の武士を近づけ  
宿の名を問ひ給ふに「菊川と申すなり」と答へければ承久  
の合戦の時院宣書きたりし咎に依つて光親卿關東へ召し下  
されしが此の宿にて誅せられしとき

昔南陽縣菊水

汲下流而延齡。

今東海道菊川

宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡今は我が身の上になりあは  
れやいとどまさりけん一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれ  
けり。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめん。

大井川を過ぎ給へば都にありし名を聞きて龜山殿の行幸  
の嵐の山の花ざかり龍頭鷓首の船に乗り詩歌管絃の宴に侍  
りしことも今は二度見ぬ夜の夢と思ひ續け給ふ。島田藤枝  
に懸かりて岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に宇都の山邊  
を越え行けば葛楓いとしげりて道もなし。昔業平の中將の  
住む所を覚むとて東の方に下るとて「夢にも人に逢はぬな  
りけり」と詠みたりしもかくやと思ひ知られたり。

清見瀉を過ぎ給へば都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に  
いとど涙を催され、むかふいづこみほが崎興津浦原打ち過  
ぎて富士の高嶺を見給へば雪の中より立つ煙上なき思に比  
べつゝ明くる霞に松見えて浮島が原を過ぎ行けば汐干や淺

き船浮きておりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車がへし竹の下道行きなやむ足柄山の嶺より大磯小磯見下ろして袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれど日數つもれば七月二十六日の暮程に鎌倉にこそ著き給ひけれ。

也余嘗爲往還數回不堪感歎一有卽吟之詩物計五十有三首字字言言似詩不眞詩似狂不眞狂只取其中間以遣漫興且使不履實地者一覽貫通知名區名物之大凡大略耳 天保七年丙申春詩山小畑行簡

東海道中詩

東海道中詩

自 引

京都 御所公卿列粉牆娘兒妓女競紅粧琴歌鼓笛喧呼裏別有風流華月鄉

扶桑驛路之繁榮以東海道爲第一風景名區之衆多又以東海道爲至矣北望山嶽南觀蒼溟或出野入邱

大津 八處名區一處檣琵琶湖上眼前看生憎戶賣分風畫墨染僧衣鬼面丹

出邱入驛驛々行程莫不有名物名產是以往還之旅人尤夥多而大小名目措焉腰帶刀劍者莫非庶士輩佩筆視

草津 陸地羸驂水上舟中山東海路分頭圍々妙製姥之餅案決行人暫刻休

者莫非畫詩人也身纏紗衲手擎鍍鉢者乃知僧侶道士身著白衣首戴菅笠者乃知伊勢詣之人也其中歌聲

石部 參宮已畢歸途宿二子心焦爲濼傷一夜巫山雲雨夢了堅來世九泉藏

嬌軟者有矣蠻語關笑者有矣停杖移時者有矣噫行不休者有矣兩脚倦怠則賃歸馬或乘歸輿者有矣腹內空虛則飲酒

水口 茶船鼎席插花餅風雅工夫一一輕此地京都餘韻在街商買得搭肩行

或喰餅飯者有矣天日未斜而投逆旅者有焉路傍之樹蔭

土山 雲乎霧歟霧還陰店賣油衣待客尋買得道中連

催二宿者有焉是其繁榮非履實地者難共談其妙

在街商買得搭肩行

日雨、渾身濕漉不關心。

坂下 女童延客泊爭先、響應尤佳二百錢、夏夜可奇。

無白鳥亭中裸臥得安眠。

關 市井松亭隣竹軒、關門迹絕古風存、傳言無賴禪僧到、

尿射街頭石佛尊。

龜山 馬子轎夫載客行、請看城下列華臺、地名視得家

家富、龜腹生龜萬世榮。

莊野 日長途遠滑泥多、四體疲勞可奈何、傾倒小囊錢

已乏、今宵宿料典蒼藜。

石藥師 古來遺迹藥王師、日拯行人累卵危、靈驗雖全如

影響、嫖貧二病不知醫。

四日市 街中乎日悉繁榮、隔去京師四日程、表石分途

伊勢近、女兒相伴笑歌聲。

桑名 小站嬌娘紙扇風、煽燃松子一爐紅、炙燒蛤貝

無傷損、食而人贊美味隆。

宮 八劍祠前華表東、蒲帆直受十分風、波濤七里渾無

恙、艇艇飛過一睡中。

鳴海 精工織出木綿絲、絞染花紋紺色奇、夏日歸遣行旅

約、襜褕黏著美人肌。

池鯉鮒 十二青銅求守札、毒蛇辟易比無倫、旅人行道

勝醫藥、靈驗全瘥未病辰。

岡崎 街陌華臺映夕陽、二川橋影霓虹長、艷歌相和三弦

曲、舞是紅粧好女郎。

藤川 一聲傳命驛亭前、毛脚夫群欲曉天、幾許茅茨肩未

脫、馬行鳴響覺春眠。

赤阪 西國諸侯入府春、刀鎗箭隊行宮路、新、常是街中供

厦、不虞猶泊數千人。

御油 巖途左右陰森暗、慘憺單行宮路山、笑語有童來

指示、驛程相近坂油間。

吉田 往來垂暮旅人多、逆旅流行聞艷歌、樓上有聲招

者孰、翠紅長袖小嬌娥。

二川 指搖逆旅欲投初、下戶羈人藥有餘、分塵糝砂糖

牡丹餅、盛來盆皿忽空虛。

白須賀 潮觀坂上店垂帷、名物饅頭味特稀、數十布帆

如<sub>レ</sub>白鷺<sub>レ</sub>琉璃鏡面受<sub>レ</sub>風飛。

荒井 往來有<sub>レ</sub>法匠<sub>レ</sub>爭<sub>レ</sub>先、客易篙師不<sub>レ</sub>出船、諸國旅人

一齊蹠、鼈時稽首在<sub>レ</sub>關前。

舞坂 一番船去<sub>二</sub>一番船、海上波平快霧天、帆腹孕<sub>レ</sub>風風正

順、不<sub>レ</sub>圖瞬息著<sub>二</sub>汀邊。

濱松 一對肩荷蹠遞夫、歌聲高唱緩行<sub>レ</sub>途、平途如<sub>レ</sub>砥松

齊立、葉葉生<sub>レ</sub>風塵更無。

見附 碧海無<sub>レ</sub>雲只淼漫、潮聲故逐<sub>二</sub>旅人<sub>一</sub>寒、行中從<sub>レ</sub>是

天晴日戴<sub>レ</sub>雪芙蓉次第看。

袋井 宿中名水即琉璃、功比油山佛藥師、連日行人生<sub>レ</sub>

垢腹、半菟一泄是良醫。

掛川 刈<sub>二</sub>葛春山<sub>一</sub>曝漚精、鶯梭雲縷織來清、世言裁斷宜<sub>二</sub>

單袴<sub>一</sub>、一著何人不<sub>二</sub>脚輕。

日阪 蕨粉擾<sub>レ</sub>湯饅軟新、不<sub>レ</sub>黏齟齒味殊珍、路中空腹

雖<sub>レ</sub>難忍、行旅總無<sub>二</sub>饑餓人<sub>一</sub>。

金谷 雨霖霖後水連<sub>レ</sub>天、固禁行人謾渡<sub>レ</sub>川、一橐囊空連

日泊、仰<sub>レ</sub>頭歎<sub>レ</sub>脚羨<sub>レ</sub>飛鳥。

島田 裸身蓬髮水成<sub>レ</sub>鄉、群立遙汀砂石場、負載不<sub>レ</sub>嫌朝

暮渡、鳴<sub>レ</sub>唇波浪越<sub>レ</sub>肩浪。

藤枝 長爰數十迹綿連、各自爭<sub>レ</sub>先欲<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>川、鼈膝老婆難<sub>二</sub>

尾續<sub>一</sub>、歎看<sub>二</sub>一艇去<sub>二</sub>汀邊。

岡部 製妙街家新豆腐、竈湯珠沸煉<sub>レ</sub>雲煎、仙刀切出全軀

軟、白雪清霜四角巖。

鞠子 豐公一宿問<sub>二</sub>街中<sub>一</sub>、何物名高饒有<sub>レ</sub>工、薯蕷汁羹侍臣

料、眞兼<sub>二</sub>蓴菜<sub>一</sub>滑相同。

府中 店開十字市街中、丹黑盆箱組織籠、不<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>行人<sub>一</sub>分

雅俗、歸遺入<sub>レ</sub>袖別<sub>二</sub>西東。

江尻 家有<sub>二</sub>千軒<sub>一</sub>物每奢、戶開名產賣<sub>二</sub>煎茶<sub>一</sub>從來一百牛

車備、器械米蕪運送譁。

興津 芙蓉峰露<sub>二</sub>瑤顏<sub>一</sub>、清見寺高名<sub>二</sub>宇寰<sub>一</sub>、子不<sub>二</sub>相知親

不<sub>レ</sub>識、客途酸味滿<sub>二</sub>山間。

由井 出<sub>レ</sub>街正有<sub>二</sub>孤郵在<sub>一</sub>、畫幅留<sub>レ</sub>人展觀供、田子烟波富

峯雪、更添<sub>二</sub>三穗櫻枝松。

蒲原 午後旗亭欲<sub>レ</sub>息初、賃低歸馬與歸輿、旅人乘跨無<sub>二</sub>几

士、或雁或歌行路徐。

吉原 珍珠粒米釀 仙漿 酒色如霜味美香、人喫半甌望

亦好、富山影入眼眸涼

原 驛路行望富士山、山峯如削琢瑤顏 雲離雲聚多奇

態、潛顯驚人隱息間。

沼津 沼津名產好雲丹、味美何人不飽餐 海港淼茫風景

妙、併浮島島起波瀾。

三島 光生三島一神堂 鑲玉銷金斗帳長、揭額有名文字

古、血戈時世憶鎌倉。

箱根 馬能雖越峻山間、不許飄然出此關 江戶旅人

忘、奈紙行程廿里只空還。

小田原 茅屋高歇八棟梁、銷金欄上藥釀香、痰痾易解

如春雪、日日爭求透頂香。

大磯 行人擔石網評誼、昔日三郎試力痕 更怪高名化粧

坂、砥鹽變化地藏尊。

平塚 欲渡行人賃小船、勿爭十二孔方錢、水流流勢常

如箭、容易難爲著岸邊。

藤澤 憶昔婉嬌照女情路扶少粟、挽車行、爲憐三子

無間日寺有名僧誦佛經。

戶塚 店開戶戶風帷短、俵米香薰四席隅、什佰一千

萬億、算盤誰指開彈珠。

程谷 古名帷子相模牧、永錄年來程谷稱、大小諸侯投宿

日、鎌倉街道憶衰興。

神奈川 街中風俗習東都、樓上絃歌日夜娛、絕景常著袖

師浦、漁人釣釣互忘吾。

川崎 旅人爭渡六鄉川、笑語聲喧道路邊、萬歲亭中吞酒

別、大師原與辯才天。

品川 樓樓倚海無濤、常泊商船數百艘、來去有人入江

戶口、語音清爽氣風高

日本橋 覆盆富士來橋上、無數商船橋下留、真是人間多

福處、菜魚米穀總如邱。

(終)

◎東海道五十三次阿茶江節

お江戸日本橋七ツ立、初上り、 行列そろへてアレワイサ  
 ノサ コチャ高輪夜明けの提灯けす、 戀の品川女郎衆に  
 袖引かれ 乗りかけ御馬の鈴ヶ森、 コチャ大森細工の松  
 茸を、 六郷渡りて川崎の萬年屋、 鶴と龜との米饅頭、  
 コチャ神奈川急いで程ヶ谷へ、 痴話で口説は信濃坂戸塚  
 へ、 藤澤寺の門前で、 コチャ止めし車を綱で引く、  
 馬入渡りて平塚の女郎衆は、 大磯小磯の客を引く、 コ  
 チャ小田原相談熱くなる、 のぼる箱根のお關所でチヨト捲  
 り。 若い衆のものと受取れぬ、 コチャ新造じやない  
 かと一寸三島。 さげも沼津に原つどみ吉原の 富士の山  
 川白酒の。 コチャ姐さん襷の蒲原へ。 愚痴を油井出す  
 さつた坂馬鹿じや、 からんだ口説も奥津川。 コチャだ  
 まして寝かした戀の坂。 江尻津かれて氣は府中はまくりこ  
 どらを打つのがどうわんこ、 コチャ岡部で笑はど笑はんせ

藤枝娘はしほらしや投げ島田、 大井川へとだきしめて。  
 コチャいやでもおしても金谷せぬ。 小夜の中山夜泣石日坂  
 の、 名物わらびの餅を焼く。 コチャ急いで通れや掛川  
 へ、 袋井通りで見附けられ濱松の 木陰で舞坂捲り上  
 げ。 コチャ渡に乗るのが荒井宿、 お前としらざ二川の  
 吉田屋の、 二階の隅ではつめい油。 コチャお顔を赤坂  
 藤川へ、 岡崎女郎衆はちんちりう能く揃へ、 鳴海絞は  
 宮の舟 コチャ焼蛤貝じやと一寸桑名、 四日市から石薬  
 師願をかけ、 庄のわるさを直さんと。 コチャ龜山薬師  
 を伏し拜み、 互に手を取り急ぐ旅心せき、 坂の下から  
 見上ぐれば。 コチャ土山つゝじで目をくらす、 水口び  
 るに紅をさし玉揃へ、 どんな石部のお方でも。 コチャ  
 色にも迷ふてグニヤ〜と、 お前と私は草津縁ボチャ〜  
 と 夜毎に月入るうはが餅。 コチャやばせで大津の都入  
 り。